

レーモン・クノーの『青い花』における歴史 ＝物語の終焉あるいは金、銀、鉄の形象(その3)

— 1614年の物語(後半) —

尾形弘人

はじめに

『ひとつの規範的な歴史』(以下『規範』)を参照しつつ『青い花』の物語＝歴史を読み進めてきた我々は、1614年の物語が黄金時代から銀の時代への移行として始まること、しかしながら、巧みに配された銀の形象によって果された移行も束の間、今度は諸々の鉄の形象が矢継ぎ早に現れて《鉄＝労働》の時代を告げていることを確認した。文脈を簡略に振り返れば、以下のとおりである。黄金時代の住人として1264年の物語に登場してきたオージュは、1439年の末尾において絶対的な空腹を知り、労働なき飽食が許される起源の幸福を失ってしまった。しかし、そこは策士オージュのこと、続く時代の物語に身を移すにあたって、彼は様々な銀の形象——婚姻の祝いのリーヴル銀貨、食堂に備えられた銀製の食器、娘婿となるべき三人の^{オム・グルジヤン}守銭奴＝銀の男たち——を自らの城に導き入れることにより、首尾よく銀の時代の住人となって《貪り食う dévorer》幸せをふたたび手に入れた。他方、彼の分身でありながら常に自らの食を嘆いていたシドロランも、手の込んだ偽名の策術を弄することにより、本来は彼の夢に見ているオージュのものである《銀の食》を口にすることができた。ところが、その奇跡的に成功した夕食の最中に、彼は《鉄の斧》にまつわる慣用表現について給仕頭とちょっとした議論を交わし、《深い淵＝奈落の底 abîme》にも通ずるこの形象が契機となって、オージュは同じく鉄の時代を象徴する《現在進行中の工事＝労働 travaux en cours》へと導かれていった。その場面には、これもまた労働＝歴史の隠喩である《彫像》も見られ、ここに至って一切は、来るべき鉄の時代を指し示しているか

のようである。その間およそ10頁程度、加速度的な展開ではあるが、ここまでは『規範』のシナリオ通りの筋立てであり、我々は『青い花』の前半部に黄金から銀を経て鉄の時代へと移行行く《歴史》の忠実なる寓話を読み取ることができた。ところが、鉄の時代の入り口とでも呼ぶべきこの地点において、テキストは奇妙な反転を見せ、とうに失われたはずの黄金をふたたび語りだすのである。『青い花』の中間点に現れ出した思いがけない反転ないし逆行、その意味するところは何か。我々の拘束的な読みの破綻であろうか、それとも尚もシナリオは続くのか。今回はこれを問題の中心に据え、1614年の物語を読み続けよう。

IV-1. 1614年後半(その1): 労働の隠喩としての錬金術

場面は三部会に出席中のオージュが立ち寄ったパリ郊外のアルクーエの町、話題となっているものは「我らが勇敢なる王アンリ4世像に次いで、現在もっとも多くの訪問客を集めているパリの名所」(F.B., p.134)。見物中に尿意ないし便意を覚えひとり供達から離れたオージュは、突然の大雨に遠くに見つけた薪置き場へと逃げ込んだ。奥には扉があり、開けてみると炉に屈み込むひとりの人物の姿があった。

— さがれ、粗忽者が！ 濡れたお前さんがそこにいると、最後の操作が汚されてしまうのではないか。[……] さがれと言っておろうが！ ルビーの木が緑のカナリヤに変貌し、そいつのくちばしが滋味豊かな黄金をすでについばんでいるというのに。

— 黄金だと！ と公爵は叫んだ。そっちの隅に黄金があるというのか？

相手は答えてやろうともせず、坩堝のうえに屈み込み、絶望の叫び声を上げる。

— 畜生！ と彼は喚く。緑のカナリヤが鉛の雌鳥に変わってしまった

た。全部やり直しだ！(F.B., p.136)

いま、この場における錬金術師の登場は、我々の予想を大きく裏切るものである。もう一度確認するが、直前の場面で《彫像＝歴史》や《工事＝労働》を目にしているオージュは、これらが象徴する鉄の時代の入り口に身を置いているのである。テキストに記されるべきは鉄の形象であって、決して黄金ではないはずである。しかも、黄金は4頁の間に集中して7度も繰り返され(F.B., pp.136(×4), 137, 138, 139), その頻度は1264年のあの《トゥール製金貨¹⁾》の横溢をも思わせる。もっとも、この黄金には手に持って重みの感じられる実体性が欠けており、いかに反復、強調されていようとも、オージュの労働なき飽食に資するところは何もない。その意味では、これは虚ろな記号、名ばかりの黄金に違いないが、しかし、これが錬金術師の口から語られるとあっては話は別である。もし賢者の石が手に入れば、それが生み出すであろう無限の黄金と不老長寿の妙薬は、以前とは比較にならないほど豊かで、また二度と破綻することのない黄金時代を実現することであろう。その意味で、この実体なき黄金はひとつの可能態でもあり、かつて結婚の祝いのリーヴル銀貨がそうであったように、これによりオージュは、目前に迫った危機——以前は黄金時代の終焉、今回は鉄の時代＝労働の不幸への移行——を脱することであろう。しかし、錬金術師ティモレオ・ティモレイの登場とともにテキストが黄金へと反転するとすれば、鉄＝労働の時代を語ることのないまま、物語は歴史の寓意であることを止めてしまうことになる。確かに「実に邪悪な探求 *recherche bien noire*」(F.B., p.151)による一攫千金の企ては、その如何わしさをも含めて、いかにも策士オージュに似つかわしい奇想ではある。また、その突飛な飛躍は『青い花』の奇抜な物語展開に適ってもいよう。しかし、問うべきは物語の奇想などではなく、歴史の必然性である。『規範』のシナリオと照らし合わせてみた場合、現在の状況においてオージュが錬金術師と出会うことは、歴史の寓話として如何なる意味をもち得るのであるか。注目すべきは、ティモレオの次の台詞である。

— やり直せだと！ 旦那、27年もの労苦が台無しになったばかりだ
 というのに！ 27年だ！ しかも、この坩堝のなかに黄金が真に美しく
 現れ出ようとした時に、門外漢のあんたがこんな場違いな闖入などをし
 やがって。(F.B., p.136)

語源的に言って、《労苦 *labour*》という語は《労働》を意味するラテン語
 《*labor*》に由来しており、ここで錬金術師はまさしく《労働する者》として自
 らを規定しているのである。その限りでは、労働の時代への移行点において
 オージュがティモレオと出会うことは理解し得るが、しかし、この労働する
 者がことさら錬金術師であらねばならない理由は何か。しかも、一般的に理
 解されている錬金術のイメージはむしろ山師的なものであり²⁾、《労苦=労働》
 という語の響きに内包される実直さ、真摯さ、勤勉さなどは、とうて
 い相容れないもののようにも思われる。テキストのうちに《錬金術=労働》
 という等式が見られるとしても、それを成り立たせる根拠が不明なうちは、
 二人の出会いに歴史的な必然性を認めるわけにはいかないだろう。いかなる
 脈絡において両者は等号で結ばれ、どのような事態を表しているのであろう
 か。

結論から言えば、この等式を成り立たせるものは、歴史のシナリオにおい
 て労働の果すべき特異な合目的性に他ならない。『規範』によれば、労働は
 「Q [=ある地域が提供する食物量] を増加関数とすること」(H.M., p.80)
 と定義され、その目的は「復楽園へと向かって前進し、人間の幸福を企てる」
 (H.M., p.103) ことにある。敷衍すれば、起源における労働なき飽食が失われ
 た時、人間は人口に比して不足することとなった食糧を増大させるべく労働
 を選び取らざるを得ないが、その不幸なる運命において営々と積み重ねられ
 た創意工夫の結晶が、ついに労働を必要としないほどの高い生産性を実現
 する時、労働とともに歴史は消失し、「歴史が止む時、この時代[=黄金時代]
 がふたたび得られる」(H.M., p.25) ののである。他方、物質世界と精神世界と
 の隠された照応関係を読み取る錬金術の象徴体系においては、諸金属は黄金

という完全態として生み出されるべきところを、多くは生成の過程で劣化してしまった結果、現実の世界には諸々の卑金属が存在することとなったが、それらは自らのあるべき姿を求めて「鉄→銅→鉛→錫→水銀→銀→黄金というサイクルをたどって、活潑に完成へと向かう³⁾」という。秘された奥義について語ることは我々の射程を遥かに超えるが、絶対的な起源にして究極的な目的でもある自らの完全態を目指して、現実の不完全なる自己を発展解消的に否定し続けるという一点において、錬金術と労働はともに同一の目的性と方向性を有していることは明らかであろう。こうして一見相容れないように見える錬金術と労働が、内に秘めた理想（郷）への憧憬によって等号で結ばれることになる。錬金術とは労働の隠喩に他ならず、鉄＝労働の時代の入り口でオージュが錬金術師と出会うことは、歴史のシナリオに欠くべからざる象徴的な出来事であると言えよう。

IV-2. 1614 年後半（その 2）：黄金，銀，鉄の流れるセーヌ川

『規範』の記述をもとに以上で検討してきた事柄については、1614 年の物語（そして『青い花』の物語）の後半の冒頭を飾るセーヌ川の描写が、錬金術＝労働の隠喩を自己言及的に解釈、提示しているように思われる。話は例の《成功した食事》の続きで、真夜中、激しい腹痛に目を覚ましたシドロランは、平底舟の甲板に出てセーヌに嘔吐しかけたが、食事の値段を考えて危うく堪えた。

彼は戻り、用足し場へと向かう、そして腹の荷を軽くして、ポチャンという音を聞く、また何か、次の汚水処理場まで、あるいはもしかしたら海にまで、水面を進むのだろう。(F.B., p.140)

シドロランがセーヌの流れに委ねた《何か》とは何であろうか。それを知るためには、セーヌ川を舞台とする一連の記述を総合して検討し、その意味

するところを吟味する必要がある。まずはカヌーでセーヌに繰り出したシドロランの川下りから順に見てみよう。

シドロランは大河の流れに従い、時々方向を手直しする以外にはもう漕ぐことはない。彼は静かに進み、車の往来がなくて可能な時には、時折、破裂する泡や、水面に現れる魚、大河の底で生まれては、風がちりばめるふたつの細波の間でそれ相応の謙虚さをもって爆発しにやってくる発酵の産物を耳にする。(F.B., pp.140-141)

まず注目したいのは、流れを下るシドロランが順次耳にする《泡》、《魚》、《発酵》の多元決定的な意味とその配列である。これらをオージュが辿っている歴史の象徴物と結び付けてみると、とても偶然とは思われない意味の連鎖が浮かび上がってくるのである。第一に、川の流れに生ずる《泡 bulle》は、その同綴異義語の《勅書、教書 bulle⁴⁾》を介して、神聖ローマ皇帝カルル4世の歴史に名高い《金印勅書 bulle d'or》を連想させる。第二に、《(小さな)銀の魚 (petit) poisson d'argent》と言えは西洋衣魚の俗称で、屋内の湿った場所に住む身近な虫であるだけに、この連想も突飛なものではないだろう。最後に《鉄 fer》であるが、これは《発酵 fermentation》の綴りの一部を成しており、また、出来すぎにも思われるが、アルコール発酵のような微生物による自然の作用もまた、フランス語では《労働 travail》と呼ばれている。このようにして見ると、流れのうちに黄金、銀、鉄を順に秘したセーヌ川は、これまでオージュが辿ってきた歴史の隠喩として解することが可能であり、この川をカヌーで下るシドロランは、ここで『青い花』の物語の前半を総括していると言えよう。そこで我々も物語＝歴史に配された金属の形象を振り返ってみると、そこにはシドロランのオージュに対する一種の先導性が浮かび上がってくる。例えば、オージュが黄金時代の幸福に浴している間、シドロランの物語にはすでに《銀の男＝守銭奴^{オム・グルジオン}》が姿を見せており、これを受けかたちで、オージュは銀の舞台装置を整えていった。また、本論の冒頭で

振り返っておいた《銀の食》、《鉄の斧》、《現在進行中の工事=労働》についても事情は同じで、劇的な物語展開を準備した者は、常に変わらぬ無為性に沈むシドロランであった。対するオージュはといえば、確かに彼は活動的で暴力的に歴史を渡り歩いてはいるが、1264年の物語（十字軍参戦にまつわる聖王ルイとの悶着）にせよ、1439年の物語（封建貴族を去勢しようと目論む国王シャルルに対する謀反）にせよ、彼がその凶抜けた破壊性を発揮するのは、ノルマンディーの城における安楽な暮らしを守るといふ、むしろ消極的で保身的な動機を秘していた。つまり、《慣性の法則》を具現するかに見えるシドロランこそが、《外的な力》であるべきオージュが意外にも隠しもつ保守性を突き動かす力となっており、それ故、上の引用でシドロランが流れにカヌーを任せつつも《時々方向を手直しする *rectifier la direction*》ことは、時に歴史の本流を逸脱し自らの物語を内に閉じようとするオージュを、『規範』のシナリオへと導くことを意味していると言えよう⁹⁾。

とするならば、こうしてセーヌ川=歴史の流れに舟を浮かべる彼が、川下りの最後にカヌーを「どこかの釣り人によって立てられた杭」(F.B., p.141)にくくりつけることも、象徴的な意味を帯びてこよう。というのも、「善良なる哲学者 *philosophes bons*」(F.B., p.30)の趣味とも、何もしないでじっとしている「とりわけ愚かな *surtout idiot*」(F.B., p.158)行為とも評される《釣り》ではあるが、その見かけ上の罪のなさに反し、『規範』においては、鉄の時代に放り込まれてしまった人間が最初に採るべき労働のひとつに挙げられているのである¹⁰⁾。すなわち、カヌーが係留されたこの杭は、シドロランがオージュを誘って到達したばかりの地点を指し示すとともに、そこがもはや取り返しのない不幸な場であることを告げているのである。それでは、夜も明け始め、「最初の釣り師たち *les premiers pêcheurs à la ligne* が現れる」(F.B., p.141)時に、言い換えれば、オージュが初めて労働する者=錬金術師と出会った時に、シドロランの行ったことは何か。杭からカヌーを解いて、今度は「流れを遡るために」(F.B., p.141)漕ぎ始めたのである。セーヌ川を遡ることが、起源の楽園を目指して営まれる労働を意味することは、も

はや言うまでもないだろう。また当然のことながら、これは泡、魚、発酵に隠された金属の墮落の過程を逆に迎える錬金術の隠喩でもある。つまり、川下りが歴史＝物語の総括であったとすれば、ここでシドロランは、錬金術＝労働による黄金（時代）への回帰を先取りして示しているのである。

ここで先の問いに戻れば、シドロランがセーヌの流れに委ねた《何か》とは、象徴的に言うならば、我々が《銀の食》と呼んだものに他ならない。錬金術＝労働を知ったオーージュが鉄の時代に身を移すや否や、その分身として奇跡的に食したあの豪勢な料理を、シドロランは糞尿という不浄なものとして排泄したのである。すなわち、銀から鉄への劣化ないし不幸なる墮落である。しかし、テキストはセーヌの流れがこの糞尿＝鉄を《污水处理場》へと導くであろうことを《未来時制》で記すことを忘れてはいない⁷⁾。つまり、鉄にまで墮してしまった金属は、これから浄化の過程に入って黄金を目指し、この卑金属によって象徴される時代を生きる人間は、労働なき飽食を許す黄金時代を取り戻すべく、不幸なる労働を開始するのである。川を遡るシドロランについては、「彼は少々苦勞し、行きよりも遥かに時間をかけた」(F.B., p.141)と記されている。錬金術＝労働の長くて苦しい道程が予想されるが、周遊から帰ったシドロランが繰り返し見せる「ある種の満足 *une certaine satisfaction*」(F.B., p.141)は、困難な企ての果てに得られるであろう満足、幸福なる黄金時代への回帰の喜びを思わせはしないだろうか。

IV-3. 1614年後半(その3): シドロランの《地平》と《女性のシルエット》

ところで、川の隠喩の折り返し地点において象徴的な杭に自らのカヌーをくりつけたシドロランではあるが、彼自身は「私は釣りが好きではない」(F.B., p.30)と語っている。「残酷だから」(F.B., p.158)という理由だが、「働かないでいることがとても上手だ *Il sait très bien ne pas s'occuper*」(F.B., p.62)と評されるシドロランのこと、これは初歩的な労働をさえ厭わ

しく思う彼の徹底した無為性の表れとも言えよう。しかし、振り返ってみれば、これまで家事の一切を任せていた娘ラメリーの結婚により、シドロランもまた、オージュと同様に、いやオージュに先駆けて、労働の不幸をすぐ目の前にしていたのであった。

それから彼は、缶詰は何が残っているか、食糧庫に見に行く。大袈裟ではなく、まだ二週間分はある。今から二週間のうちに、アルベールが誰か見つけてくれるか、シドロランには分からない。アルベールが何も見つけなければ、シドロランは彼のストック stock を改めねばならず、地平線に à l'horizon 敗血症が現れるのが見える。(F.B., p.116)

直訳しておいた最後の部分は、缶詰だけでは《やがて à l'horizon》体を壊しかねないということで、敗血症とは仰々しいが、これだけでは大した意味はもたない。しかし、ここに見られる《ストック》と《地平》との並置は『規範』の重要な記述を想起させるもので、上の描写は見かけ以上に示唆的である。それは《記憶と地平 mémoire et horizon》と題された項で、そこには「もし周期がそれ以下であれば、記憶と予見が働くことであろう。こうしてひとつの解決法が模索され、最初はストックということになるだろうが、ここから労働が生まれる」(H.M., p.83)と記されている。ここで《地平》とは、過去の危機の記憶に基づく予見の持続可能な限界のことであり、そこにおいて問題となるのは、「予見される危険が集団の決断に影響を及ぼし始めるのは、どの瞬間からなのか」(H.M., p.82)という点である。もし危機の周期が地平の限界を超えていれば、記憶は風化し、予見は行動に移されないまま、その集団はいずれ消滅するしかない。これを避けるためには、記憶と予見が地平の果てに達しないうちに、来るべき食糧危機に備えねばならず、その最初の試みが木の実などの《ストック⁸⁾》だということのである。とするならば、シドロラン自身がいずれは尽きるであろうことを《予見》している二週間分の缶詰こそが、彼にとっての《地平》ということになるだろう。すでに用意されているス

トックが誰の手によるものかという問題は残るが⁹⁾、彼の頼みとする缶詰は、飽食とは言えないまでも¹⁰⁾、とにかくこれまで維持されてきた《労働なき食》の最後の命綱に他ならない。シドロランが相変わらずの無為のうちに自らの地平の限界を越えるとすれば、極端に言ってそれは餓死に至る愚行であり、予見を行動に移すことなく滅んでいった集団の悲劇的かつ滑稽な劇画となろう。もっとも、いかにシドロランといえども、このような結末は非現実的であり、彼は自らストックを实践することであろう。しかし、これは労働の不幸の受け入れを意味し、いずれにせよ嘆かわしい事態がシドロランを待ち受けているのである¹¹⁾。

だが、シドロランが《地平》線上に見たものは、敗血症ではなかった。彼にとって幸いなことに、待ち望んでいた家政婦がついにやって来たのである。

シドロランは彼が遠ざかるのを見つめ、それから反対方向を振り返ると、地平線にひとつの女性のシルエットが見えた。地平線の女性のシルエットはひとつの旅行鞆によって補足される、かようにその前進はさほど早いものではない。

— あれは、私のためだ、とシドロランは小声で言う。(F.B., p.143)

餓死か、それとも労働か、その際どい《地平》に登場してきて、しかも4度繰り返される《女性のシルエット silhouette féminine》は、遠くに浮き出た点描人物などではあり得ない。実際、この輪郭だけの形象には実に多様な意味が充填されており、ここに現れ出た女性の何たるかを、すでに饒舌に物語っている。第一にまず、このシルエットの反復強調は、やはり二度繰り返されている《地平線に/の à l'horizon》という重要な表現と相まって、我々をテキストの冒頭に記された印象的な記述へと連れ帰る。それは「地平線上には疲れたローマ人のふやけたシルエットが描かれていた [……]」(F.B., p.13) という一文で、これは厄介な大仕事を意味する《ローマ人の仕事 travail du Romain》の振りであった。つまり、このシルエットは労働する者の

それである。次いでテキストの多元決定性は、こうして辿り着いたローマを経由して、この都市の伝説上の創始者ロムルスによる《サビニ女の誘拐》へと行き着く。以前にも述べたように、『規範』の解釈によれば、この誘拐は性的な目的ではなく、もっぱら労働に資するために為されたもので、また、このような女性の斡旋こそがシドロランのアルベールに求めるところであった¹²⁾。すなわち、ここに現れ出たシルエットは、労働を強いられる女性のそれである。他方、《シルエット silhouette》の語源から辿っていけば、この語はルイ 15 世の時代に財務大臣を努め、極端な節約によって王の財政の建て直しを図ったエチエンヌ・ド・シルエットに由来している。言い換えれば、彼は《財産を取り仕切る gouverner》立場にあったわけだが、図らずもフランス語では、家政婦、とりわけ現在のシドロランがそうである寡夫の世話をする家政婦は、まさしく《財産を取り仕切る女性 gouvernante¹³⁾》と呼ばれている。とするならば、この《女性のシルエット》は、財務に長けた《女性版エチエンヌ・ド・シルエット》としてやって来たとも言えよう。

それでは、この女シルエット＝サビニ女の果すべき《大仕事》とは何か。気難しい不平家シドロランのもとに家政婦として残ることにした彼女ラリックスは、思うところをこう述べている。

— もし荷物をまとめようというのであれば、とシドロランは言う、邪魔はしませんよ。もし即刻退散するとしても、一か月分の給金を払っても構いません。

— あなたがお金 *votre argent* を失うことは望みませんわ。(F.B., p. 155)

敢えて文脈を捨象して言うが、サビニ女＝女シルエットの労働のおかげで《お金＝銀》が失われずに済むということは、銀の時代とは言わないまでも（というのも、これは本来オージュのものであるから）、少なくともそれに類する状態に留まり得ることを意味しよう。すなわち、《ストック》の手間か

らシドロランを救うことになる《女性のシルエット》は、美食かどうかは別として¹⁴⁾、ともかく平底舟の住人の《労働なき食》を維持させるべく、彼の危うい《地平》に姿を見せたのである。

IV-4. 1614年後半(その4): 銀の連なり, 鉄の不在, 青銅の彫像

順番は逆になったが、女性のシルエットが現れる直前の場面に戻ろう。セーヌ川の周遊から帰ったシドロランの満足げな表情を確認してページをめくると、果たしてそこには《労働》という語が三度記されてある。シドロランがひとりの通行人とちょっとした労働談義を始めたのである。予想通りの展開であるが、しかし、そこに教会への寄付を募る男が割り込んできて、労働の時代の象徴物とは別の金属の形象がふたたび語られることになる。

— あれは仕事ではありませんねえ、と通行人が言った。あんな振舞い方では、大した収穫は得られないに違いない。

— 自分のバイクのガソリンを買うのに必要なんですよ。

— そうおっしゃるのは、あなたの考えでは、彼が集めるお金 argent, 彼はそれを神の栄光に捧げたりはしないからですね。(F.B., p.142)

これもまた奇妙な振れである。改めて確認するが、そもそもの問題は鉄の時代の入り口に現れ出た黄金であった。この反転ないし逆行については鍊金術=労働の隠喩によって一応の解答が得られたが、今度はこの可能態としての黄金をも含めた一切の記述が、鉄の時代への完全なる移行を予想させる地点において、過去のものとなったはずの銀の形象がふたたび姿を現わしたのである。何故に鉄ではなく銀なのか。まず言えることは、これが直後に姿を現わす《女性のシルエット》の儀式的な予告となっていることである。シドロランの《お金=銀》を守るために登場する女性がこれと同一の金属によって先導されることは、十分に納得されよう。しかし、『青い花』全体について

言えば、彼女にまつわるふたつの銀によって、我々の問題はさらに複雑さの度合いを増してしまったようである。実際、これらの銀の配置は、錬金術師のノルマンディーの城への登場を挟み込むかたちとなっており、さらにその場面自体にも、この同じ金属の形象が嵌め込まれているのである。ティモレオを連れて三部会から城に戻ったオージュは、妻リュスユールにこう語っている。

— [……] 次の三部会の時に、貴女を連れて、それ [= アンリ 4 世像] を見に行こう、まあ、そう遠いことにはなるまい、母后におかれては、大いにお金 *argent* を、ということは租税を必要としておられるのでな。
(*F.B.*, p.147)

これまでのテキスト構成からすれば、錬金術師＝労働する者の城への受け入れは鉄の時代の到来を意味するはずで、かつてリュスユールや三人の婿たちを銀の食器類が出迎えたように、ティモレオの登場場面にも何らかの鉄の形象があつて然るべきであろう。しかし、実際に記されているものはラリックスのふたつの《お金》と連なる銀の形象であり、また銀の時代への移行の際に見られたような登場人物の変化も一切ない¹⁵⁾。他方、賢者の石の探求はこれからの話であるから、ここに挿入されたお金＝銀がすでに果された金属純化の産物であるとは考え難い。仮にこれが《そう遠くない》うちに得られるであろう銀（の時代）であるとしても、そのためにはまず錬金術＝労働を受け入れねばならず、その始まりに鉄の形象が不在であることは、やはり問題提起的であろう。そこで注目したいのは、この欠如せる鉄に代わって新たにテキストに導入された青銅と、この金属によって鑄造される予定のオージュの彫像である。

— それで私は、とリュスユールは目を伏せながら言う、私も自分の彫像を持つことはできないのでしょうか。

— 持てるとも、妻よ。そのことは考えた。礼拝堂のなかに貴女は素晴らしい墓碑を持つのだ、我が亡きエロディのものよりもずっと美しい墓碑を。そこに石に彫られた貴女が見られるというわけだ。わしとしては、青銅の方が好みだが。(F.B., p.148)

まず彫像について言えば、三部会の際にアンリ4世像を見たオージュは、自らも愛馬デモステーンに跨った騎馬像を所望するようになり、万事手筈を整えてパリから戻ってきた。以前にも述べたように、歴史的建造物である彫像に自らの姿を刻ませることは、それまで彼が頑なに拒否し続けてきた歴史への参与を意味する。しかし、同じく歴史を象徴する《現在進行中の工事》については、これを拒絶するかのような態度を彼は見せていた¹⁶⁾。つまり、錬金術を知る直前のオージュは歴史＝労働に対して肯定と否定との間で揺れ動いており、この両義性のテキストへの反映が、在るべき鉄の欠如に他ならないと言えよう。すなわち、シドロランの鉄の斧によって導かれた地点において、おそらくオージュは歴史＝労働への移行を不可避的なものと認めながらも、それまで身を置いていた銀の時代に尚も固執するが故に、錬金術師＝労働する者が登場してくるオージュの城には、鉄＝労働の形象が欠けているのである¹⁷⁾。

オージュの彫像が認知されながらも否定される歴史＝労働の象徴物であるとすれば、それに姿かたちを与えることになる《青銅 bronze》もまた、単に材料となるべき物質名であるに留まらないであろう。示唆的であるのは、上の引用におけるリュスユールの石の墓碑とオージュのブロンズ像の並置である。というのも、ここに我々は《石器時代 âge de la pierre》と《青銅器時代 âge du bronze》を読み取ることができるからである。もちろんこれは考古学上の時代区分であって、『規範』の歴史とは直接的には関係しない¹⁸⁾。しかし、同じ青銅によって形容される時代であっても、文語で《青銅時代 âge d'airain》と言えば、黄金時代の衰退を物語る神話において、まさしく銀の時代と鉄の時代との間に位置する一時期を指す。もはや銀の時代ではない

が、まだ鉄の時代とも言えないような過渡的な状態、あるいは、不幸なる労働の胎動は見られるが、やはり労働なき飽食の最後の名残であるような時代、そのようなものを青銅時代と称するならば、これほど適切にオージュの現状を表す金属の形象は他にはないであろう。だが、青銅の彫像が不在の鉄の穴を埋める代理表象であるとしても、オージュの城において銀の形象が公然と語られ、しかも、これをシドロラン（ラリックス）のふたつの銀が挟み込んでいるのは何故か、という最大の問題は残ったままである。言い換えるならば、錬金術師＝労働する者を城に迎え入れながら、それでもオージュがいまだ労働を知らない銀の時代の住人であり続けるようなシナリオは、まだ示されていないのである。

IV-5. 1614 年後半（その5）：銀の時代の終焉、戦争と隷属化

それでは『規範』の描くシナリオは如何なるものであろうか。青銅時代に関する記述はないが、それに相当するであろう《銀の時代の終焉¹⁹⁾》の項を見れば、「XXXVI [=銀の時代] の終末において、人類はタイプ (B) の減退的な解決法か、労働か、もしくは様々な形態における戦争 [……] によってしか抜け出すことのできない状況に陥ることになる」(H.M., p.50)とある。オージュの見せる両義的な態度からすれば、鉄の時代への即時的な移行を意味する労働は、ここでは問題となり得ない。また、妻が世継ぎを懐妊した時のオージュの喜び²⁰⁾、およびそれが誤りであったことを知った時の失望と激怒を見れば²¹⁾、性欲を抑制して人口の増加を制限する減退的な解決法も排除してよいであろう。それでは、戦争はどうであろうか。ここでティモレオとの出会いを振り返ると、「彼は扉を何度も蹴っ飛ばし、肩で体当たりを食らわせ、ついに合釘と蝶番が屈した」(F.B., p.135)と記されている。つまり、錬金術師が「場違いな門外漢の闖入 malséante et profane irruption」(F.B., p.136)と言っていたように、本来は錬金術＝労働の外部にいるべきオージュが、自らの破壊力に物を言わせて、ティモレオの侵すべからざる聖域である

薪置き場を蹂躪したのである。だが、攻め込まれたかたちの錬金術師も負けてはいない。

— [……] 失われた、いやそれどころか、一発やりそこなった歲月！
それもどこに雨宿りしたのかも知らない田舎紳士のせいだ。

— まてまて、と公爵は面白がって答える。田舎紳士だと？ お前は誰に向かって話しているのか分かっているのか、^{ふいご} 鞆吹きめが？

— お前こそ誰に向かって話しているのか分かっているのか、田舎紳士が？

— 田舎紳士にこだわる奴だ。わしはオージュ公爵だ、三部会で我が地方の貴族階級を代表しておる。

— うへえ。我こそはティモレオ・ティモレイ、飲用の、また非飲用の黄金の真なる作り方を知るキリスト教世界で唯一の錬金術師なり [……]。(F.B., p.137)

ここで錬金術師は侮蔑表現の《田舎紳士 hobereau》を連発して招かざる客に対して優位に立とうとし、また、ほとんど口から出任せに長々と自らのもつ不思議な力を誇示してもいる²²⁾。だが、「そんなものは黄金には値しない」(F.B., p.138) と一蹴するオージュ。失敗は公爵の「無理な割り込み、介入 intrusion」(F.B., p.138) のせいだ、と応酬するティモレオ。両者相譲らぬこのやり取りが戦争の劇画であるとするならば、次に検討すべきは、これがいかなる形態の戦争を寓意するものか、という点であろう。注目したいのは、ここでオージュが、必要な費用の一切、教会の詮議からの庇護、豪華な食事を餌に、「お前の黄金と妙薬をわしに利用させてはどうだ」(F.B., p.139) と持ちかけることである。好条件を提示してこの策士が目論んでいることは、要するにティモレオを《下部 serf》として従えること、それにより錬金術＝労働の成果を搾取することに他ならない。つまりこれは《隷属化 asservissement》という戦争の一形態であり、『規範』はこれを「[……] 敗者に (C)

の解決法 [=労働] を採るように強制することによって、勝者が擬似的な黄金時代 [=銀の時代] に居座ることを可能にする複合的な状態」(H.M., p. 50) と定義している。とするならば、これ以上に現在のオージュの願望に合う策略は他にはないであろう²³⁾。つまり、労働が不可避的なものであるとするならば、これを他者に押しつけておいて、自らは尚も労働なき飽食にありつこうというわけである。とはいえ、シナリオの完成のためには、まずもってオージュが完全なる勝者とならねばならない。だが、錬金術師は提示された交換条件にも「アルクーユを離れることは我に苦しみを与えるであろう²⁴⁾。熟考が求められる」(F.B., p.139) と、容易には首を縦に振らない。そんな敵対者を完全に打ち負かしたのは、やはり愛馬にして腹心のデモステヌであった。人語を操る馬の出現に、錬金術師は「うう、ま、ま、馬が、が、喋、喋っている……」(F.B., p.139) の一言を残して気絶し、小屋に積まれた《炭 charbon》のうえに倒れ込んでしまった。偶然の(とはいえ、歴史の寓意としては必然的な) 闖入に始まる戦闘の勝利、敗者に《きつい労働を引き受ける aller au charbon》ことを強いる隷属化の完成である。

こうして、問題の一切がこのシナリオに収斂することになる。簡略にまとめれば、唐突にテキストに現れた錬金術は労働のもっとも適切な隠喩であり、それ故、労働の時代の入り口におけるオージュとティモレオとの出会いは必然的な出来事であった。しかし、オージュが認める労働は他者の労働であって、自らは労働なき飽食の維持を欲しており、この両義性は鉄でも銀でもない青銅の彫像によって象徴されていた。とするならば、錬金術師=労働する者を受け入れたにも関わらず、オージュの城に鉄の形象が不在であり、また逆に、尚も銀の形象が現前し続けているのは何故か。それはこの他者の労働の受け入れが、隷属化によって果される銀の時代の最後の延命策だからである。逆に言えば、このシナリオには《労働する他者》の存在が不可欠であり、だからこそオージュはティモレオとの戦闘において、無礼極まる相手を殺しもしなければ(《皆殺し》のシナリオ)、薪置き場から追い出しもせず(《追放》のシナリオ)、錬金術師=労働する者を生かしたままノルマン

ディーに連れ帰ったのである。実際、オージュが戦利品として得た坩堝や蒸留器といった道具は、これを用いる術を知る者なくしては何の価値もなく、そうなれば錬金術＝労働の成果を搾取して銀の時代の延命を図ることもできない。それでは最後に、このオージュの銀を挟み込んでいるふたつの銀の形象はどうか。この銀はいずれもシドロランの物語に新たに登場してきたラリックスにまつわるもので、ひとつは彼女を先導し、もうひとつはこの女性の使命を告げていた。その使命とはシドロランの《お金＝銀》を守るために労働力を提供することであり、これはそのままティモレオがオージュのために果たすべき役割でもある。言い換えれば、隷属化とはサビニ女の誘拐という特殊な事例をより一般化したものに他ならず、実際、オージュはティモレオに対して古のロムルスの子き振舞いを見せている。つまり、アルクーユを離れることに躊躇を見せる錬金術師に対して、「すべては熟考のうえだ。三部会が終わったら、お前のあばら家と、それから薪も引越しさせて、我々とともに持っていくことにしよう」(F.B., p.139)と一方的に事を進めるオージュは、自らの安楽のために労働を強いるべき他者を無理やりに《誘拐》したのである。したがって、連なる三つの銀の形象は、サビニ女たるラリックスと隷属に屈したティモレオとの鏡像的な関係を表現するものであり、着実に進んでいる鉄＝労働の時代への移行においても、問題の中心が労働なき食の維持にあることを示しているのである。こうしてオージュは、賢者の石、不老長寿の妙薬、卑金属を黄金へと変ずる術を求めて、《実に邪悪な探求》に突き進むことになる。果たしてティモレオの錬金術＝労働は、起源の黄金(時代)を実現して、主人の労働なき飽食を維持し得るのであろうか。

註

※) 使用テキスト

Raymond QUENEAU, *Les Fleurs bleues*, Gallimard, 《folio》, 1965. (なお引用に際しては略号 F.B. を用いる。)

Raymond QUENEAU, *Une Histoire modèle*, Gallimard, 《nrf》, 1966. (なお引用に際しては略号 H.M. を用いる。)

- 1) これは正確には《精製された純粹で混ぜ物のない黄金でできたトゥール製金貨》というもので、このまったく同一の表現が5頁の間に6度反復されていた(F.B., pp.54, 55, 56(×2), 57, 58)。
- 2) ここで我々が想定しているイメージは、オネジフォール司教の次の発言に典型的である。「その炉の炎は地獄のそれを思わせ、黄金を欲することはまったくもって断罪すべきものである。不老長寿の妙薬については、これもまた長寿なりと主張されるあの林檎を食べるように勧めながら、悪魔が我々の最初の両親に、神ノ様ニ在ルナラン、と言ったことが思い出される……」(F.B., p.151)。
- 3) セルジュ・ユタン著、有田忠郎訳、『錬金術』、『文庫クセジュ』、白水社、1972、p.101 (Serge HUTIN, *L'Alchimie*, coll. 《Que sais-je?》, N°506, P.U.F., 1951.)
- 4) さらに、この語源となったラテン語《bulla》は、古代ローマにおいて未成年の自由民の子弟が首にかけていた《金の玉飾り boucle d'or》を意味していた。
- 5) このことはシドロランの次の発話に、より明確に読み取られよう。「水は少し汚れているように見えますが、淀んではいません。いつも同じゴミが見られるわけではないのです。時々、棒で押してやると、それらは水の流れに沿って過ぎ去っていきます。あちら側では、それでもやはり、少し淀んで腐っていますが」(F.B., p.145, 強調は引用者)。
- 6) 初期的な労働については、後に問題となる《ストック》とともにこう記されている。「労働の最初の形態は、その地域によって提供される食物量と現実に消費される食物量との間に存する差に注目すること、すなわち $Q-Q(N)$ のプラスの量を——可能な範囲内で——ストックすることにある。第二のものは、 Q [=食糧] の唯一の源泉であった植物界の資源に動物界のそれを付け加えること、すなわち、猟と釣りによる資源を切り開くことからなる」(H.M., p.72)。ただし、《ストック》と《猟、釣り》の前後関係は必ずしもこのとおりではない (cf. H.M., p.99)。
- 7) 原文は《quelque chose qui voguera jusqu'au prochain champ d'épandage》である。また、この《何か》が最後に行き着く《海 mer》も、生み出す者としての《母親=起源 mère》を想起させよう。
- 8) ストックについては註6)を参照のこと。
- 9) シドロランがパンを買う場面もあるが(F.B., p.115)、我々としては「そんなこと [=家事] はどれも自分にはうんざりだし、それにもっばら女の仕事だ」(F.B., p.99)と決めつけるシドロランの言い分を強調し、娘ラメリーが結婚前に用意しておいたと考えたい。
- 10) 皮肉なことには、娘の作る食事について「ラメリーはまともに料理が作れるようには絶対にならないだろう」(F.B., p.16)と嘆ずるシドロランは、自らが缶詰で作ったサンドイッチを「そんなに悪くはなかった」(F.B., p.116)と述べている(もっとも、彼はやはり敗血症を心配するのだが)。
- 11) 付け加えて言えば、シドロランが至福の《銀の食》において不吉な《鉄の斧》を口にする 것도、このような現状を反映したものであろう。
- 12) シドロラン自身、「彼女を性的に所有することには基本的には、いやいや全くこたわらない」(F.B., pp.99-100)と語っていた。
- 13) 実際、シドロラン自身の口からこの語が発せられる場面がある。「それでは、私の新しい家政婦 ma nouvelle gouvernante のことは、どう思いますか？」(F.B., p.197)。
- 14) ラリックス自らが「美味しい食事 un bon repas」(F.B., p.154)と言い、また

シドロランも「素晴らしい食事 excellent repas」(F.B., p.158)と認める食事の場面があるが、最後にはやはり「予見していたように、ジャムにカビが生えていた」(F.B., p.159)と語られ、例の《またしても失敗だ》の一言がシドロランの口から漏れることになる。だが、完璧ではない食事であっても、彼の《労働なき食》が守られたことの方が遥かに重要である。

- 15) 銀の時代に登場してきたオージュは、開口一番、「わしの顎鬚をどう思う」(F.B., p.119)と語っていたが、ここでもこの外観は維持されており、「なんだと、と公爵は顎鬚のなかで言う、わしが錬金術師を連れてきたというのに、これでは人が多すぎる」(F.B., p.146)という記述がある。また、以前には身分の変化が見られたオネジフォルとムスカイヨについても、ここでは何の変化もない。
- 16) もっと間近に《工事=労働》を見るように勧められたオージュは「皆は行くがよい、わしはもううんざりするほど見た Moi, j'en ai assez vu comme ça」(F.B., p.134)と述べていた。
- 17) ただし、註2)のオネジフォルの台詞に見られる《地獄 enfer》のなかに、《鉄 fer》の唯一の痕跡が認められる。先に見た《発酵 fermentation》同様、両者の間には語源的な関連性はないが、《地獄》のなかに潜む《鉄》は、樂園喪失の後に人間が陥った労働の不幸を思わせよう。
- 18) 敢えて関連づけるならば、《鉄器時代 âge du fer》を含めたこれらの時代区分は、労働が必要に応じて生みだした諸々の道具の材質によって規定されるものであり、労働を本質的な定義とする《鉄の時代 âge de fer》の下位区分として考えることはできる。ただし、『規範』には、こういった史実的な記述は一切ない。
- 19) ここで《銀の時代の終焉》とは、ひとつの集団におけるそれではない。その場合は処女地に移り住むだけで問題は解決されるが、しかし、これは危機の先延ばしに過ぎず、いずれ地上はどれも人間で満たされることになる。このような状況における食物量と人口との均衡関係の破綻が、ここでいう銀の時代の終焉である。
- 20) オージュの不在中、リュスユールはひとりの占星術師から世継ぎを授かることを予言され、それを知ったオージュは彼女の腹に触れながら「ここにいるのだ、我が世継ぎが。ここに隠れているのだ、我が世継ぎが。素敵な隠れ場だ。ああ、リュスユールよ、なんと大きな喜びを与えてくれたことか [……]」(F.B., p.147)と、子を授かったことを手放しで祝福している。
- 21) 占星術師デュボンの予言は《これから》リュスユールが懐妊するであろうというもので、激怒したオージュは「デュボンの喉に飛びかかり、その強力なふたつの手で彼の首を絞め始めた。ジョアシャンが彼に不満を説き、ペテン師達に対する軽蔑を思い知らせる間、占星術師は両の目を眼窩=軌道から追い出そうと望むかのようで、青白い舌を出している」(F.B., p.152)。
- 22) ティモレオ・ティモレイの言うところによれば、彼は「ハエのように天井を、主イエス・キリストのように水面を歩き、ここ、そしてノバエスパニアに同時に存在し、預言者ヨナのしたがる如く鯨の腹にて旅をし、アリオンのようにイルカ達にまたがり、アタランテーも及ばぬほど早く走り、馬のない馬車で移動し、鷹と燕のように空を切って進み……」(F.B., p.137)、また、「ミツバチの言葉を理解し、学ぶことなくトウピナンバ達の言語を話し、千里離れた人と会話し、天球の妙なる調べを聴き、すべての秘密文書を苦も無く読み、千と三冊の作品の内容を暗記しており、一度も研究せずともあらゆる事柄について適切にしゃべれる」(F.B.,

p.138)という。ただし、これ以後、彼が実際にこういった能力を発揮することはなく、やはり《口から出任せ》の観は否めない。

- 23) 先に引用した『規範』の《銀の時代の終焉》には、戦争の他の形態として《皆殺し extermination》と《追放 expulsion》が挙げられている。いずれも他の集団をその領地から一掃して移り住み、労働なき食を確保しようとするものである（ただし、占領した領土がこれまで以上の食物を供給し得ることが前提となっている）。だが、これらはオージュがノルマンディーの城に固執する限り、できれば避けたい解決法であろう。
- 24) 錬金術師との出会いの場面に Arcueil の町が選ばれたのは、《(錬金術の) 秘法, 秘薬 arcane》との関連によるものと思われる。